

住宅を設計する上で、使い勝手とデザインとコストを調整する際に、どうしても意識するのは、無駄なスペース（デッドスペース）を無くすことです。設計の基準寸法（モジュール）にグリッドされた設計用紙に敷地の形を落とし込むと、建物をどのように配置すればデッドスペースがなくなるのかの検討が始まります。そして、内部の設計に手をつけ始める時も同様のことが頭の片隅にちらつきます。クライアントのご要望を手掛かりにコンセプトを考え、敷地の周辺環境を考慮して最適を導き出すことがクリエイティブの中心ですが、そのプロセスの中にコスト調整も加わるので考えがなかなかまとまっていきません。

「もうちょっとゆとりあるスペースをとってあげたいけど…無駄かな。」みたいな事を思う時に自問するのは、一見するとデッドスペースに見える部分が空間の「余白」としてちゃんと機能しているのかということです。コンセプト上必要な余白であったとしても、コストバランスを意識しすぎてついつい消されてしまう場合もあります。とても残念なことですが、そうやって消された余白は決してデッドスペースではなかったんだということを完成した建物を見て感じることもありました。

住宅の高性能化がすすむにつれ、住まいづくりは性能を重視する傾向があります。なるべくサイズを抑えてその分を性能にコストを回すといった感じです。全館空調する住宅も増えているのでなるべく廊下やホールは無くし収納を確保するのが合理的でいいプランだと言えますが、やはり最初に建てた設計コンセプトに忠実に判断していかないと、何かもの足りなさを感じてしまうかもしれません。合理的につくられたプランから消される無駄かもしれないと思うスペースは本当にデッドスペースなのかを慎重に検討する必要があります。採光を確保するために設けた吹き抜けや坪庭、外部との広がりや演出するために設ける縁側やウッドデッキなどは、コストカットの対象にしてはいけないと思います。空間を活かすための必要な「余白」なのです。

日本には余白に美意識を感じる文化があります。「わびさび」とは茶の湯文化から派生した用語ですが、余白の美意識を語る上

余白の重要性。

zuiun便り vol.52

でこの定義することもままならない抽象的な世界感や境地にこそ感情を動かす秘訣があるようです。茶の湯文化は人をもてなす日本特有のスタイルです。小間（こま）と言われる4畳半くらいの小さな茶室の中で行う所作を通じて「もてなす」ということに向き合う精神世界です。茶室の内装（しつらえ）はとても質素です。華美な装飾は一切なく花を一輪だけ壁にしつらえることで季節感を演出し、さらに障子窓から薄暗い室内に差し込む光には庭の木々が影になってに映り込み、その映り込む時間さえも演出効果を上げるために計算しています。想像力があればこそその最小限で無限の広がりを感じることのできる演出手法です。余白を想像力で補い共有することで成立する究極の美意識です。

商業デザインの現場でも余白の捉え方を一つの手法として活用しています。余白があるからこそ対象物が際立つので様々な商品や広告にも応用されていますし、アートも余白の扱い方が一つの技法になっています。空間の中で余白を設けることも設計のテクニクなのです。

豊かな空間をつくるには平面的な検討からは得られない情報を把握しておくなくてはなりません。設計用紙のグリッドからパズルのピースを埋めるように配置を考え、デッドスペースを消していくような方法では豊かな空間は生まれません。敷地の周辺環境の光や景色を空間に上手に反映させるためには、立体の中で生まれる余白が生む空間のリズムが、視覚的に空間をつなげ光や風をコントロールしたり、内部と外部をつなげるバッファー（緩衝領域）となるのです。

今回の内覧会の住宅には玄関として使うには大きすぎるほどの土間スペースを設けています。入り口と裏庭に面して開放できる大きな引き戸があり、全開放すれば室内でありながら外部みたいな空間に様変わりします。その土間に椅子や小さなテーブルを置けば色んな用途が生まれます。時には来客用の応接に、時には開放的に外部とつながってゆっくりと自分の時間を過ごすコージーコーナーとなります。その土間の可能性を余白と見れば、そこで繰り広げられる楽しみ方を想像する時間もまたいいものです。